法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

ハンガリーにおける産業化以前の家族構造

ファラゴー, タマーシュ / 羽場, 久浘子 / アンドルカ, ルドルフ / ハバ, クミコ

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社會勞働研究 / Society and labour
(巻 / Volume)
34
(号 / Number)
3-4
(開始ページ / Start Page)
181
(終了ページ / End Page)
149
(発行年 / Year)
1988-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00018449

49) J. Hajnal, "European marriage patterns (ヨーロッパの婚姻形態)", *Population in history* (歴史に見る人口), London, 1695.

50) R. Andorka, "Fertility, nuptiality and household structure of peasant communities of Hungary in the XVIIIth-XIXth centuries (18-19 世紀におけるハンガリー農村共同体の出生率，結婚率と，家族構造)", 19 世紀における農業構造と地域発展に関する研究会での発表論文，Gödöllő, 1976.

51) K. Davis, "Institutional patterns favouring high fertility in underdeveloped areas, (後発地域における多産性の構造形態)", *Eugenics Quarterly*, 2 1955.

52) 農村研究において，相続方式については，充分調査されてこなかった。領主は，分割される土地は農奴の元の土地の 4 分の 1 を越えてはならないと規定することによって，分割相続を制限しようとしてきたが，ハンガリーのある地域では，農奴の間で分割相続方式が比較的広範に行われていた，という例も報告されている。(Fél and Hofer, 前掲書，1961) トランスダニューブ南部のシャールケズとオルマーンシャーグに近い小さな村アンドラーシュファルヴィでは，ハンガリー人農民の間における分割相続の方式と，ドイツ人農民の間における非分割相続の方式とが観察できる。ドイツ人農民の間では，長子が全農場を相続し，次男以下は，金銭によって償われた。(*Ellentétes értékrendek összeütközése és a polgárosodás*; 対立する価値体系の矛盾とブルジョア文明，1973.)

53) W. Goldschmidt and E. Kunkel, "The structure of the peasant family (農民の家族構造)", *American Anthropologist*, 73, 1971.

35) Palli, 前掲論文, 1974.

36) Plakans, 前掲論文, 1975.

37) Czap, 前掲論文, を見よ。

38) Hammel, および Halpern, 前掲論文, 1972.

39) このことは, 一部の農奴家庭にいる, 子供のない未婚の人々に対する我々の扱い方から引きおこされるのかもしれない。我々は, 彼らが別々の家族を営んでいることがはっきりとわかる場合を除いては, 彼らをひとつの家族に含んでいるのである。

40) Faragó, 前掲論文, 1976. "Háztartásszerkezet és falusi társadalomfejlődés Magyarországon 1787-1828 (1787-1828年のハンガリーにおける家族構造と農村の社会発展)", *Történeti Statisztikai Tanulmányok*, 3, 1977.

41) Dányi, 前掲論文, 1977.

42) Fél, 前掲書, 1948. Morvay, 前掲論文, 1965. Szabó, *Munkaszervezet és termelékenység a magyar parasztságnál a 19-20 században* (19-20世紀におけるハンガリー農民の労働組織と生産効率), 1968. Fél and Hofer, 前掲書, 1969.

43) Veress, 前掲論文, 1958. "Háztartás, telek és termelés viszonya hegyaljai és bodrogközi jobbágyfalvakban a XVI század derekán (16世紀中庸のヘジュアヤおよびボドロケズの農奴村における家族, 農地, 生産関係)", *Jobbágytelek és parasztság az örökös jobbágyság kialakulásának korszakában* (世襲農奴制成立期における農奴地と農民), 1966. Faragó, 前掲論文, 1975.

44) Szakály, 前掲論文, 1970.

45) Dányi, 前掲論文, 1965.

46) A. N. J. Hollander, "The great Hungarian plain (大ハンガリー平原)", *Comparative Studies in Society and History*, 3, 1960-61.

47) M. J. Jr. Levy, "Aspects of the analysis of family structure (家族構造に関する分析の諸相)", A. J. Coale et al. (eds), *Aspects of the analysis of family structure*, Princeton, 1965. T. K. Burch, "Some demographic determinants of average household size (平均的家族規模に関する人口統計上の決定要因)", P. Laslett and R. Wall, 前掲書, 1972.

48) R. Andorka, "La prévention des naissances en Hongrie (ハンガリーにおける出生に対する偏見)", *Population*, 1971. "Un exemple de faible fécondité légitime dans une région de la Hongrie (ハンガリーの一部の地域における低い出産率の例)", *Annales de Démographie Historique*, 1972.

22) P. Laslett, "Introduction", 前掲論文, 1972, 86-8 頁を参照。

23) 「日雇い農」の基本的で正確なカテゴリーは, 以下の如くである。即ち, 農村共同体の貴族以外のメンバーであり, 農場は持たないが, 牧草地など他の権利を持って, 農村共同体に参与している者。社会学的観点から見れば, そのカテゴリーは多様である。a) 一部の日雇い農はいくらかの土地を領有しているが, それは農奴の土地ではなく, たとえば開墾した森林の土地である。b) 他の日雇い農はほとんど土地を持っていないが, 家は持っている。c) 一部の日雇い農は家も持っていないが, 農奴の家に住み, 農奴のために, あるいは他の人のために働いている。d) 日雇い農の法律上のカテゴリーとして職人も含まれることがある。

24) 例えば, シャールピリシュ, 1792.

25) 例えば, シャールピリシュ, 1804.

26) 例えば, ファイス, 1762.

27) A. Plakans, "Peasant farmsteads and households in the Baltic littoral, 1797 (バルト沿岸における農民の農場と家族, 1797 年)", *Comparative Studles in Society and History*, 17-1, 1975. および H. Palli, "Perede struktuurist ja selle uurimisest", *Eesti NSV Teaduste Akadeemia Toimetised*, 23-1, 1974. と比較せよ。

28) 初期の出版物においては, 使用人と家なし日雇い農は, たとえ彼らに自分の家族がいたとしても, 常に基本的に彼らが住んでいる家の農奴の家族に含まれていた。民俗学者との討論をへて, 我々は, これらの使用人と日雇い農の家族が, 農奴の家に住んでいる場合においても, 食事を準備したり食べたりする時には別の家族単位で行動していたことを立証するに至った。

29) 使用人と日雇い農を区別しうる統計が整備されているナジコヴァーチ, ペルバール, ピリシュサーントーの 3 つの村では, すべての日雇い農は別の家族を形成しているものとして分類することができた。

30) デンマークの農村, インドの農村, 中国の農村に関し, 類似の原則にもとづいて作られた統計表については, Hajnal, *Family forms in Historic Europe*, 1983, 表 2-1～3-5 を参照。ベルギーの西フランダースの農村については, W all, 同書, 表 12-5 を, 南東ブルージについては, 同書の表 14-7 を参照。

31) P. Laslett and R. Wall (eds.) *Household and family*, 前掲書, 1972.

32) Halpern, および Hammel, 前掲論文, 1972.

33) Czap, 前掲論文, を見よ。

34) P. Laslett, 前掲論文, 28-34.

tén 1747-1748 (1747-1748年のヴェスプレーム司教区における大家族制とその構造), 1973. T. Faragó, "Household structure of Nagykovácsi in the eighteenth century (18世紀のナジコヴァーチにおける家族構造)", マニュスクリプト, 1975.

9) L. Mándoki, "A kölkedi népszámlalás (ケルケドの住民統計), 1816," *Janus Pannonius Muzeum Évkönyve*, 13, 1971. J. Barth, "Fajsz népessége a 18. század közepén (18世紀中庸におけるファイスの住民)", *Bács-Kiskun megye multjából*, I, 1975. R. Andorka, "Peasant family structure (農民の家族構造)", *Acta Ethnographica Academiae Scientarum Hungaricae*, 25-3-4, 1976.

10) I. Taba, 前掲論文, 1962. F. Szakály, "Sziget mezőváros (Somogy megye) lakosságának, "connumeratiója" 1551-ben (1551年におけるショモジ県シゲト市場町の住民統計)", *Történeti Statisztikai Évkönyv*, 1970.

11) E. Fél, *A nagycsalád és jogszokásai* (大家族制と慣習法), 1944. および *A magyar népi társadalom életének kutatása* (ハンガリー民衆の社会生活に関する研究), 1948. E. Fél and T. Hofer, *Arányok és mértékek az átányi gazdalkodásban és háztartásban* (アーターニュの経済と家族経営における構成基準), 1967. および *Proper peasants* (本来の農民たち), 1969.

12) P. Laslett, 前掲論文, 1972, 31頁.

13) これら3つの村の統計はヴェスプレームの司教により命じられた「教区民調査書」の統計から作られた。

14) この「教区民調査書」の統計は, カロチャの司教の命により作られた。この統計はバールトによって最初に公表された。Barth, 前掲論文, 1975.

15) この統計は地方の牧師達によって作られた。

16) この統計は地方の牧師達によって作られ, マーンドキによって最初に公表された。Mándoki 前掲論文, 1971.

17) Thirring, "Egy alföldi falu", 前掲論文, 1935.

18) Thirring, "Jászberény népessége", 前掲論文, 1935 および "Kecskemét népessége", 前掲論文, 1935

19) Dányi, 前掲論文, 1965.

20) Fél and Hofer, 前掲書, 1967.

21) A. Plakans, "The familial contexts of early childhood in Baltic serf society (バルト沿岸の農奴社会における幼児期の家族関係)", in *Family forms in Historic Europe*, 188-90頁を参照。

és háztartásstatisztikai vonatkozásai (1784—1787 年における家族と家族統計に関するハンガリー最初の人口調査)", *Demográfia*, 6-4, 1963.

4) P. Laslett, "Introduction: The History of the family (家族史：序)", in P. Laslett and R. Wall (eds.), *Household and family in past time* (過去における家族と家庭), Cambridge, 1972.

5) J. Halpern, "Town and countryside in Serbia (セルビアの都市と農村)", E. Hammel, "The zadruga as process (過程としてのザドルガ)", P. Laslett and M. Clarke, "Houseful and household in an eighteen-century Balkan city (18 世紀のバルカンの都市における家と家族)", 以上, *Household and family in past time*, 1972. E. A. Hammel and P. Laslett, "Comparling household structure (家族構造の比較)", *Comparative Studies in Society and History*, 16, 1974.

Peter Czap, "A large family: the peasant's greatest wealth'; serf households in Mishino, Russia, 1814-1858 (大家族制：農民の最大の財産，ロシアのミシノ村における農奴家族 1814-1858)" in *Family forms in Historic Europe* (歴史上のヨーロッパにおける家族形態), 1983.

6) Tamásy, 前掲論文 1963. T. Faragó, "Household structure and rural society in pre-industrial Hungary (産業化以前のハンガリーにおける家族構造と農村社会)", 19 世紀における農業構造と地域発展に関する研究会での発表論文, Gödöllő, 1976. D. Dányi, "Háztartás és család nagysága és struktúrája az iparosodás előtt Magyarországon (産業化以前のハンガリーにおける家族および大家族制とその構造)", *Történeti Statisztikai Tanulmányok*, 3, 1977.

7) G. Thirring, "Jászberény népessége és társadalmi viszonyai II.József korában (ヨーゼフ 2 世の時代におけるヤースベレーニの住民と社会関係)", *Magyar Statisztikai Szemle*, 13-1, 1935. "Kecskemét népessége és társadalmi viszonyai II Jozsef korában (ヨーゼフ 2 世の時代におけるケチュケメートの住民と社会関係)", *Magyar Statistikai Szemle*, 13-5, 1935. および "Egy alföldi falu népessége viszonyai II. József korában, Magyar csanád (ヨーゼフ 2 世の時代における大平原の村マジャルチャナードの住民と社会関係)", *Magyar Statistikai Szemle*, 13—9, 1935. D. Dányi, "Városi háztartások és családok a 18. század végén (18 世紀終わりにおける都市の家族)", *Történeti Statisztikai Évkönyv*, 1963-64.

8) Z. David, *A családok nagysága és összetétele a veszprémi püspökség terüle-*

割できる限界を設けることによって，また家庭における産児制限をとおして相続人の数を制限することによって，抑制された。こうして，農民は，農民家族の過度の増大を避け，同時に，家族の平均規模および拡大家族，多数家族の数を増加させたのである。

この方法から結論づけられる人口増加の比率は，同様の環境の下での西欧の農民共同体においてとられている遅い結婚，長い独身生活，産児制限のない生活，血統家族，および（あるいは）単一家族という形態から結論づけられるものと同様のものであった。

これらの2つの戦略は，明らかに単なる「理念型」であり，実際の共同体では，ハンガリーでも西欧でも，純粋な形はほとんど見られない。シャールピリシュやアルショーニェークで見られたような家族の再編の統計とも関連させながら，ハンガリーの他の共同体に関してさらにミクロな調査をすることにより，ハンガリーでこうした「理念型」がいかに広がっているか，異なった環境や，経済的，社会的条件に対し，いかなる他の方法や対応策がとられているのか，を調査することが必要であろう。

注

1） J. Morvay, *Asszonyok a nagycsaládban*（大家族の女性たち），1956. および，"The joint family in Hungary（ハンガリーの共同家族）", *Europa et Hungaria*, 1965. を見よ。

2） É. Veress, "A jobbágycsalád szervezete a sárospataki uradalom falvaiban a 17. század közepén（17世紀中庸のシャーロシュパタク領の農村における農奴の家族組織）", *Történelmi Szemle*, 1, 1958. I. Taba, "Baranya megye család és lélekszáma 1696-ban（1696年におけるバラニャ県の家族と居住者数）", *Történeti Statisztikai Évkönyv*, 1962. D. Kosáry, "A paraszti familia kérdéséhez a 18. század elején（18世紀初頭における農民家族の問題によせて）", *Agrártörténeti Szemle*, 5-1, 1963. および，V. Zimányi, *A rohoncszalonaki uradalom és jobbágysága a XVI-XVII században*（16-17世紀におけるロホンツ=サロナク領とその農奴），1968.

3） J. Tamásy, "Az 1784-1787 évi első magyarországi népszámlalás család-

初期の段階で産児制限を広範に実践していることによってのみ説明することができる。産児制限の問題を扱っている幾人かのハンガリー人研究者は，若い既婚夫婦における産児制限の強制に際しての両親の役割，とりわけ義理の母の役割を指摘している。

最後に，我々は，家族構造，結婚形態および出産率が相互に関係しており，それらが共に農民家族にとって，当時のハンガリーに一般的であった環境，および経済的，社会的状況に適合するための手段となっていたという仮説を提示したい。西欧の影響下にあり市場生産が次第に発展していた西部ハンガリーと，19 世紀において土地がまだ比較的豊富であった南部大平原の例外を除いて，18 世紀後半から 19 世紀前半のハンガリー経済と社会は，抬頭しつつある資本家とブルジョアによる国家と社会の不在に加え，土地不足の増大，産業化と都市化のほぼ完全な欠落によって特徴づけられる。

大規模な移民は，19 世紀最後の 10 年間にようやく始まったので，それまで農民は与えられた環境の下で最善を尽くすことを余儀なくされた。アルショーニェーク，シャールピリシュ，ケルケドが位置しているトランスダニューブ南部においては，若い人々に許された方法は，結婚して親の家族と住み，親の農場で雇用と生活の糧を得ると共に，結婚後に厳しく強制された産児制限によって，個々の家族成員と人口の過度の増加を制御することであった。こうして農民は土地の分散化と貧窮化，プロレタリア化を防ごうとしたのである。

農民の間では，すべての息子が両親から受け継いだ財産から平等の分け前を獲得するという，均等相続制度は受容されなかった[52)]。ゴールドシュミットとクンケルによれば，[53)]この相続制度は，父方と結びついた家族，即ち，ラスレットの分類法の用語で言えば，複数の既婚子弟を含む多数家族と組み合わせられていた。この相続制度は，農奴地の急速な分散化，家族の貧窮化を導くものであたっが，その事態は，領主が農奴の土地を再分

男子労働力を確保し，そこからより大きな労働配分を行なうことにより，単一家族が管理しうるよりもより大きな土地とより多くの家畜を管理することができたということ。第2に，土地の分散化の危険を避け，それによって，農奴の貧窮化とプロレタリア化を避けたことである。第2の機能は，人口が密集していたトランスダニューブ南部や土地が欠乏していた北部地方において，より重要であったであろう。他方，第1の機能は，土地が比較的豊富であった大平原の人口の少ない地域において，優越的であったかもしれない。

ハンガリーの家族構造の人口統計的な基盤と西欧のそれとを比較するためには，死亡率，結婚率，および出産率を分析すべきであろう。レヴィとブルホは，西欧において一般的である低い死亡率と結婚率の状況下では，拡大家族，多数家族の比率はあまり高くないことを示した[47]。1870年代の公式の人口統計に示された家族の再編[48]および自然死亡率からみて，18, 19世紀のハンガリーでは，平均余命は，西欧に比べてそれほどではないにせよ幾分低いことがわかった。他方，結婚の平均年齢はずっと低かった。ほとんどの女性は，西欧の結婚パターン[49]に比べ，数歳若い20歳の頃，結婚していた。

シャールピリシュとアルショーニェークの家族の再編の統計は，自分の子供が結婚して最初の孫が生まれたとき，既婚男女のおよそ50%は生存していたことを示している。最初の孫が生まれたとき祖父母共に生存しているケースはおよそ30%であった。実際これは，既婚子弟が両親と住んでいるアルショーニェークとシャールピリシュの多数家族の比率とほぼ同じであった。

出産率と複合的な家族との関係について言えば，シャールピリシュとアルショーニェーク[50]の家族の再編の統計は，人口統計的な研究[51]に現れている意見とは逆に，拡大家族，多数家族の高い比率と，出産率の比較的低い水準とが密接な関係にあることを示している。この事態は，結婚に際し

えたに過ぎなかったといえる。このことはもちろん，大規模で複合的な家族に関連する機能と習慣のいくつかの要素が，実際に数世紀に亙って存在したという可能性を排除するものではない。

家族構造の変化が，さまざまな社会階層の間に見られるということに関して言えば，大規模で複合的な家族の最も高い比率が，農場を持っている農奴，主に農奴のより富裕な部分に存在するという事実は，人類学者の知見[42)]や地方の資料と一致している[43)]。もし，1551 年におけるシゲトヴァールの家族が経済力に従って分類されるならば，家族規模と経済力との積極的相関関係が見いだせるであろう[44)]。ジェールでは，町の外の地域よりも，より富裕な市民が住んでいる町の中心の方が，家族は大きかった[45)]。ハンガリーのさまざまな地域を比較してみると，大規模で複合的な家族は，農奴階層の多い地方に特徴的であるが，そのような大家族は，土地なし日雇い農の比率が高い地方ではずっと少なかった。

次に，家族構造の地域的な分布に関して言えば，大規模で複合的な家族の多い 2 種類の地域が指摘できる。その第一は，経済的・環境的に貧しい条件を持つ山岳及び岳陵地帯であり，人口密度の比較的高い地域である。このタイプは，トランスダニューブ南部とハンガリー北部に見られる。第二は，大平原の南部にある人口のまばらな「開拓」地域である[46)]。これらの辺境地は，2 つの共通した特徴を持っている。即ち，ほとんど都市がないこと，経済が農民の自耕自給農業に基礎を置いていることである。

他方，大規模で複合的な家族は，ハンガリーの行政諸州，特に，トランスダニューブ西部，ブダとペシュト周辺の中央地域では明らかに少ない。そこでは，農民による市場むけ農産物の生産と，都市化が進んでいる。これらの地域では，農村人口において日雇い農（土地なし労働者）がより高い比率を占めていた。

これらの地域的特徴を基礎として，我々は，複合的な家族構造が 2 つの機能を持っていたという仮説を立てることができる。第 1 は，より多くの

び複合的な家族の比率との間には明白な相関関係が存在するように思われる。

家族規模と家族構造は，地域的に異なるのみならず，1787 年から 1828 年の間にも次第に変化した。家族の平均規模と家族ごとの成人男子，成人子弟，義理の子弟の数は，全体として増大した。(表 12, 図 2 を参照）同時に，複合的な家族の比率がより高い地域は増大し，他方，単一家族が優勢である地域は次第に減少した。

人口統計的，社会的，経済的状況と家族構造との相互関係に関する仮説

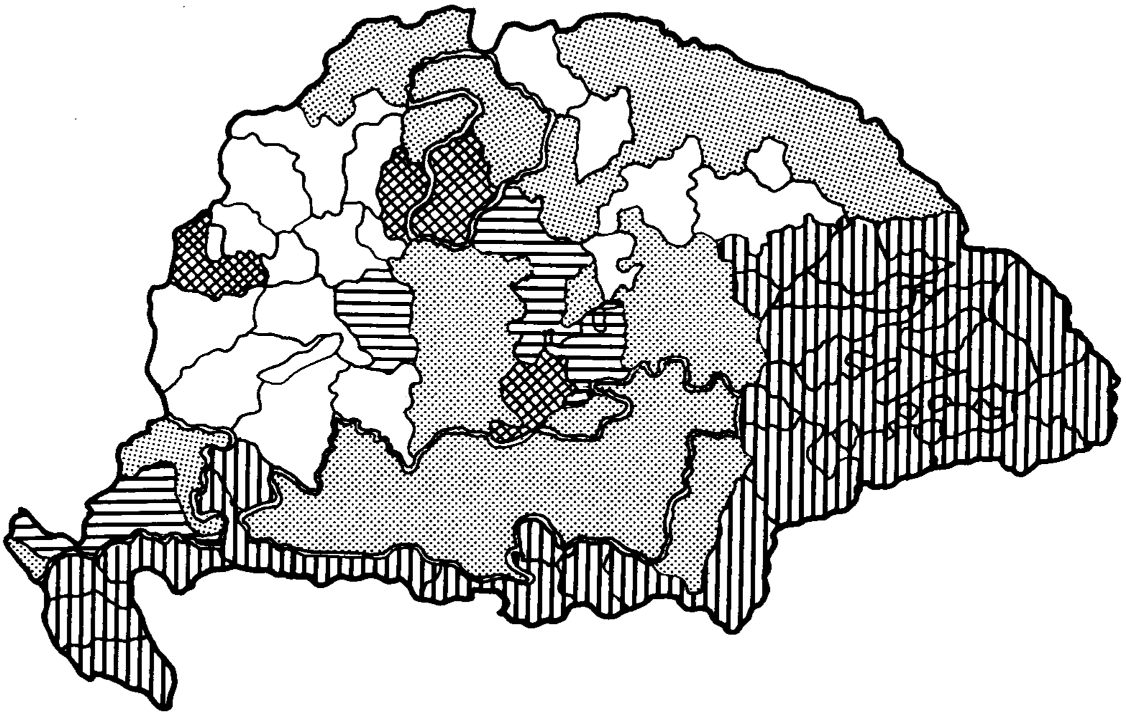
ミクロおよびマクロな調査の主な結果は，次のようにまとめられる。

1. 産業化以前のハンガリーでは，大多数の家族は，おそらく単一家族であったが，西欧に比べより多くの拡大家族，多数家族が存在していた。
2. 拡大家族，多数家族は，土地なし日雇い農よりも農奴の間により一般的であった。
3. 家族構造に関しては，重要な地域差が存在していた。
4. 家族規模と，拡大家族，多数家族の比率は，18 世紀の最後の数十年から 1830 年にかけて次第に増大した。

これらの結果を基礎に，家族構造に影響を与え，逆に家族構造からも影響を与えられる経済的，社会的要因，および，人口統計的要因に関するある仮説が立てられる。

まず第 1 に，産業化以前のハンガリーにおいて，西欧に比べ比較的大規模で複合的な家族構造は，しばしば思われていたような永続的特徴ではないと言うことであり，それは 18 世紀から 19 世紀の間に発展したものであったという仮説である。従って，19 世紀の後半に見られた複合的な大家族制の崩壊は，数世紀もの間農民の間に支配的であった家族構造の形態を変えたのではなく，たかだか先立つ 3，4 世代において進展した構造を変

図2　ハンガリーにおける複合的な家族構造が見られる地域（1787—1828年）



□ 成人[a]男子全人口中成人子弟（義理の子弟を含む）の割合が17.48%[b]に満たない地域（1804～28年）

成人男子全人口中成人子弟（義理の子弟を含む）の割合が17.48%を越える地域

1804，1819，1828年

1819，1828年

1828年

家族ごとの既婚男子が1.14人以上いる（平均よりも上回っている）地域の境界線

分析から除外されている地域

a．18歳以上。

b．成人男子人口にしめる成人子弟および義理の子弟の全国平均。

特に，次の3つの地域で大きかった。まず，ハンガリー北部山岳地帯で。第2に，大平原南部の比較的まばらな人口の地域で。そして第3には，トランスダニューブ南部の近郊，およびクロアチア，スラヴォニアで。他方，トランスダニューブ西部および大平原の北東部では家族規模が小さく成人男子が少ないことが特徴的であった。

1784—87年においては全体として大規模で複合的な家族は，ハンガリーの支配的特徴とはなりえなかった。しかし農奴の比率と，家族規模およ

表 12　ハンガリーにおける貴族以外の家族構造の変化[a]（1787—1828年）

年	家族の平均規模	家族ごとの成人男子の平均数[b]	家族ごとの子弟（義理の子弟を含む）の平均数[b]	成人男子全人口中に占める家族中の成人子弟（義理の子弟を含む）の割合[b]
1787	4.95	1.17	(—)[c]	(—)[c]
1804	5.11	1.36	0.25	18%
1819	5.16	1.36	0.25	19%
1828	5.54	1.47	0.35	23%

a．自由都市，クロアチア，トランシルヴァニア，軍事国境地帯は含まない。
b．18歳以上。
c．有効な資料なし。

がある。このことは，1784—87 年の統計，及び 1804—47 年に行われた貴族以外の統計を使って行うことができた。これらの資料から，行政諸州，あるいはそれ以外の地域の共同体における家族の平均規模と，成人の家長の数，および家族ごとの成人した子弟と義理の子弟の数をつかむことができ，さらに，社会構造（例えば，農民と日雇い農の分類）に関する情報をも得ることができた。

これらのデータは，1784—87 年の統計から貴族の家族を除いた，貴族以外の人口について，ハンガリーの歴史的諸州，トランシルヴァニア，クロアチア，および南部国境の軍事国境地帯[40)]の諸州ごとに，集計し，分析したものである。自由都市は除外された。同様の家族構造の研究が，ハンガリーの農村地帯に関する地方のデータを使うことによっても行なわれた[41)]。

18 世紀の終わりにおける，村の 18 歳以上の男子に関する社会構造は次のようであった。農奴; 33%，日雇い農（一部は極小農，他の一部は農家の地場産業によって生活する人々と同様の農業労働者）; 46%，職人; 3%，独立した家庭を持たないが，息子か義理の息子として，父または義理の父の家族と生活する者; 18%。

家族規模は，家族ごとの成人男子，成人子弟，義理の子弟の数と同様，

族は，1804 年のシャールピリシュの家族と明白に一致させることができる。しかし 11 家族は，12 年間の間に分裂している。それ故，1804 年には，1792 年から継続する家族の数は 70 家族にのぼる。(表 11 参照)

複合的な家族の増大傾向は，はっきりと示されている。1792 年の単一家族の半数以上が，1804 年までには，拡大家族あるいは多数家族になっている。理由は，すべての場合において，子供，ほとんどは息子の結婚によるものであり，両親の家庭で妻と同居するというものである。2 つのケースは，娘が結婚し，親の家庭で夫と同居するというものである。ただしこれは，家族に一人も息子がいない場合であった。

他方，多数家族から単一家族への変化は希である。多数家族が分裂したケースが 8 つあるが，分裂によって単一家族のみを形成することになったのはたった 2 つである。他の 6 つは，新しい単位の 1 つが，多数家族であった。統計からは，さまざまのことがわかる。1 つは，片親あるいは両親が死に，既婚子弟が家庭から出ていったケース。他は，寡男であった父が再び結婚し，最初の結婚でできた息子が独立の家庭を築いた場合であった。兄弟タイプの多数家族は，兄弟の子供が結婚した時，分裂することとなる。

以上のように，シャールピリシュでは，単一家族が複合的な家族になるという明らかな傾向が見られるように思える。

マクロな調査

ミクロな調査では，家族構造の型が，人口統計学的，社会的，経済的要因によって変化すると同様，時代に連れても変化することを立証することができた。しかし，それらは，国全体の代表的な像を明らかにしてはくれない。特に，ハンガリーに関してはなおさらである。というのは，ハンガリーでは，地域により環境，および経済的，社会的，人種的，宗教的様相が大きく異なるのであるから。ミクロな調査の結果を一般化するために，我々は，より未完成な手法を使いながらマクロな調査を平行して行う必要

もちろん，このサイクルが，一般的に妥当するものでないことは明らかである。いくつかの家族は，全生涯を多数家族で生活したであろうし，他の人々は常に単一家族で過ごしたであろう。初めに述べたように，家族の支配的な型は，社会，経済階層によってさまざまである。それにもかかわらず，個人が年をとるに従って，多数家族から単一家族へ，再び多数家族へと移動する一定のサイクル・パターンが存在するように思われる。

型による家族分類が，長期にわたって安定したものではないということは，既に示唆されている。シャールピリシュの場合には，2つの統計は，たった12年しか離れていないが，村の家族は再構成されているので，最初の統計から第2の統計へと家族をたどって，家族構造がいかに変化したか，これらの変化と平行していかなる人口統計上のできごとが起こったかを見つけることができた。1792年のシャールピリシュの家族のうち56家

表 11　シャールピリシュにおける家族の型の変容（1792—1804年）

家族の型 1804	家族の型 1792 3a. 既婚夫婦	3b. 既婚夫婦と子供	4a. 祖父母への拡大家族	4c. 兄弟への拡大家族	5b. 多数家族：兄弟の複合世帯
分裂しなかった家族[a]					
3a. 既婚夫婦	—	—	—	—	1
3b. 既婚夫婦と子供	1	15	1	—	1
4a. 祖父母への拡大家族	—	2	—	—	1
4c. 兄弟への拡大家族	—	—	—	1	—
5a. 多数家族：祖父母との複合世帯	—	1	—	—	—
5b. 多数家族：子弟との複合世帯	—	14	—	—	3
5c-d. 多数家族：兄弟の複合世帯	—	2	—	—	1
5e. 他の多数家族	—	1	—	—	—

分裂した家族

1792	3b	3b	4c	5b	5b	5b	5c	5d	5d	5d	5e
1804	3b 4c	3b 5a	3b 3b	3b 3b	3b 5b	3b 5b	3b 3b 5b	3b 3b 5b	3b 3b	3b 3b 5b	3b 5b

a. 明白に見分けられる家族のみをこの表に記載した。

家族の型と 家族階層	0-9	10-19	年 20-9	齢 30-9	40-9	50-9	≧60	年齢 不明	総計
既婚子弟の単位家族の 妻あるいは母	—	7	27	11	2	—	—	1	48
兄弟姉妹の単位家族の 妻あるいは母	—	—	6	7	3	1	—	—	17
単位家族以外の者	—	—	—	—	—	—	2	1	3
分類不可能な家族									
未婚の娘	4	—	2	1	—	—	—	—	7
単位家族の妻あるいは母	—	1	1	1	3	1	—	—	7
単位家族以外の者	—	—	—	—	—	1	1	—	2
不明	—	1	—	—	—	1	—	—	2
総計	81	63	58	42	44	24	14	4	330

＊一夫婦とその子供のみによって構成される家族。(conjugal family)

レケドの統計を基礎とした。(表 10)

表 10 から明らかなことは，0—19 歳の子供のおよそ半数が，単一家族に住み，半数が，拡大家族あるいは多数家族に住んでいることである。結婚後，ほとんどの若者は，何年間か両親と，拡大家族あるいは多数家族に住む。しかし年をとるにつれ，40—49 歳を頂点として，彼ら自身の単一家族，あるいは片親との拡大家族に住む比率が高まる。この年代層においては，あるいは，次第により高い年齢においても，新しい家族形態，すなわち，既婚の子弟と多数家族に一緒に住んだり，あるいは配偶者の死後，拡大家族に入り，更には順を追って，孫と住んだりする形が現れる。60 歳を過ぎると，多くのやもめ，特に寡男は，既婚子弟と拡大家族に住む者が増大する。こうして，家族の一定のサイクルが識別できる。若い既婚の夫婦は，まず，しばらくの間，彼らの両親の家庭に住むが，後に彼らのほとんどは独立した家庭を確立し，最初は単一家族あるいは片親との拡大家族を営む。しかし後に自分の子供が結婚してからは，家族は再び多数家族に逆戻りするのである。

表 10　ケルケド住民の家族の型と家族階層の年齢分布（1816年）

家族の型と家族階層	0－9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	≥60	年齢不明	総計
男　性									
単一家族									
未婚子弟	30	32	3	—	—	—	—	—	65
単位家族*の夫あるいは父	—	—	5	12	21	8	2	1	49
拡大家族									
未婚子弟	9	9	1	—	—	—	—	—	19
単位家族の夫あるいは父	—	1	1	6	4	1	—	—	13
単位家族以外の者	—	—	—	—	—	—	5	—	5
多数家族									
未婚子弟	25	18	4	—	—	—	—	2	49
親の単位家族の夫あるいは父	—	—	—	—	6	13	8	—	27
既婚子弟の単位家族の夫あるいは父	—	1	28	16	4	—	—	—	49
兄弟姉妹の単位家族の夫あるいは父	—	2	4	6	4	1	—	—	17
単位家族以外の者	—	—	—	—	—	1	1	—	2
分類不可能な家族									
未婚子弟	2	2	2	—	—	—	—	—	6
単位家族の夫あるいは父	—	—	4	1	2	1	1	—	9
単位家族以外の者	—	—	—	1	—	—	1	—	2
不　明	—	—	—	—	—	—	—	1	1
総　計	66	65	52	42	41	25	18	4	313
女　性									
単一家族									
未婚の娘	31	23	5	—	—	—	—	—	59
単位家族の妻あるいは母	—	1	7	18	18	4	—	1	49
拡大家族									
未婚の娘	6	6	—	—	—	—	—	—	12
単位家族の妻あるいは母	—	—	6	3	4	—	—	—	13
単位家族以外の者	—	—	—	—	—	3	5	—	8
多数家族									
未婚の娘	40	24	4	—	—	—	—	1	69
親の単位家族の妻あるいは母	—	—	—	1	14	13	6	—	34

家持ちの日雇い農は，土地を持たず，他人の農場で働いたが，小さな畑と庭のある家を持っていた。

家なしの日雇い農は，土地も家もなく，多くは彼らが住まわせてもらっている家人のところで，そうでなければ別の人のところで働いた。

職人は，小都市の職工であった。

農奴は，最も大きな家族を持つ傾向があり，複合的な家族はこの階層に最も多かった。家なし日雇い農は，家族の平均規模は最も小さく，複合的な家族は，彼らの間では例外であった。いくらかの土地を持っている日雇い農は，農奴とよく似た状況にあったと思われる。家持ち日雇い農は，家なし日雇い農と似ていた。職人は，比較的大きいが，複合的ではない家族を持っていた。独身者を含む家族は，農民階層には存在しなかったが，家なし日雇い農にはよくあることであった。

家族は，家長と配偶者，子弟，他の親族，使用人の平均数に従って分類されるが，家族規模の違いの最も重要な原因は，家族ごとの他の親族と使用人の数に現れる。1769 年のナジコヴァーチでは，全使用人のおよそ 80%，(既婚子弟を含む) 全親族のおよそ 90% が，農奴か日雇い農の家族と住んでいた。こうした社会的差異の理由は明らかに，豊かな農民が余剰労働を必要とし，既婚の子弟や他の親族のみならず使用人をも家族として収容する余裕があったからであろう。親族も使用人も，農場に必要な労働力を供給したのである。

以上の分析は，同一時点での，さまざまな特徴をもった家族の分類を示したものである。個々人のライフ・サイクルにおこる家族構造の変化を発見するためには，長期にわたって個人と家族を追うことが必要であり，そのためには，短期ごとに分けられた継続的統計が必要であろう。しかしこのような統計は存在しないので，我々は，家族の個々の構成員が，家族内の地位に応じた年齢においてどの家族の型（単一，拡大，多数）に属しているかを調査しようとした。この分析は，構成員の年齢が示されているケ

表8　ナジコヴァーチの家族形態および社会階層による家族分布（1769年）

家族形態	家長の社会階層 農奴（数）	土地持ち日雇い農（数）	家持ち日雇い農（数）	家なし日雇い農（数）	職人（数）	その他（数）	総計（数）
1. 独り暮らし	—	—	—	5	—	—	5
2. 一家族をなさない家族	—	—	—	—	—	—	—
3. 単一家族	30	37	15	26	25	14	147
4. 拡大家族	4	4	—	—	2	1	11
5. 多数家族	15	9	—	—	1	1	26
6. 分類不可能	—	—	—	—	—	1	1
総　計	49	50	15	31	28	17	190

表9　ナジコヴァーチの家長の社会階層と，家長との関係における家族構成員の平均数（1769年）

家長の社会階層	家族における平均数 家長と配偶者	家長の実子	その他の親族	使用人	家族の平均規模	家長家族の平均規模
農　奴	1.96	2.88	0.83	1.86	7.53	4.84
土地持ち日雇い農	1.96	2.90	0.58	0.12	5.56	4.86
家持ち日雇い農	1.93	2.27	—	—	4.20	4.20
家なし日雇い農	1.71	1.10	—	0.03	2.84	2.81
職　人	2.00	2.57	0.25	0.25	5.07	4.57
その他	1.94	1.29	0.24	0.29	3.76	3.23
総　計	1.92	2.36	0.42	0.58	5.28	4.28

普段使われている社会カテゴリーの定義に関し，いくつかの分類が必要であろう。農奴は，封建的領主・農奴関係に基づいて，土地を領有していた農民であった。彼らは，最も富裕な農民の間に入っていた。日雇い農は，他の法的基礎（例えば，森を伐採するためなど）の下に，土地を領有していた人々，あるいは，農奴の土地として規定されていた最小限の土地よりも少ない土地を領有している人々であった。

もかなり低いであろう。トランスダニューブ南部と西欧の家族とのいま一つの違いは，トランスダニューブ南部の4つの村に，独り暮らしがいないことである[39)]。

多数家族の間に家長家族タイプ，兄弟タイプの家族がかなりあることは，トランスダニューブ南部の村とブダ周辺の村をわける大きな違いでもある。トランスダニューブ南部では，血統家族タイプが支配的ではあるが，かなりの数の家長家族タイプ，兄弟タイプを見ることができる。他方，ブダ周辺においては家長家族タイプ，兄弟タイプは，非常に希である。

さらに，徐々に複合化していく家族構造の傾向が，2つの統計で比較される2つの村において，はっきりと見ることができる。この変化は，2つの統計に12年の違いがあるトランスダニューブ南部のシャールピリシュにかなりめざましい。しかし変化は，2つの統計に18年の違いがあるブダ近郊のナジコヴァーチにも見られる。それはまるでドイツ人移民の住む村の家族構造が，次第に土着のハンガリー人の村の家族構造に接近していくようである。

ファイス，シャールピリシュ，アルショーニェークの使用人と日雇い農の家族についても，一言つけ加えるべきであろう。彼らのすべては，単一家族タイプである。もし我々が，彼らを一つの家族として扱わず，自分の住んでいる家を持っている家族の構成員として扱うとしたら，単一家族の比率はより低くなり，西欧との違いはより大きくなるであろう。

総体として，18世紀，および19世紀の最初の20年間におけるハンガリーの家族構造は，西欧とセルビア・ロシアとの中間であったと思われる。しかし，国の内部では地域ごとにかなりの違いが存在する。ある部分は，西欧に近く，他の部分は東欧に近いといえる。しかしながら，家族構造の違いは，地域間のみならず，社会階層間にも存在している。ブダ周辺の3つの村では，大多数の家族の社会階層を知ることは可能であり，それ故家族構造の社会的違いを分析することができる。

表 6　家族構造：タイプ別の家族の比率

家族の型	ペルバール 1747 (%)	ピリシュサーントー 1747 (%)	ナジコヴァーチ 1747 (%)	ナジコヴァーチ 1769 (%)	ファイス 1762 (%)	シャールピリシュ 1792 (%)	シャールピリシュ 1804 (%)	アルショーニェーク 1792 (%)	ケルケド 1816 (%)
1. 独り暮らし	1	3	6	3	1	2	1	2	—
2. 一家族をなさない家族	1	1	—	—	1	—	—	—	—
3. 単一家族	85	71	79	77	56	72	54	44	47
4. 拡大家族	6	8	7	6	10	5	9	15	13
5. 多数家族	5	17	7	14	32	21	36	39	36
6. 分類不可能	2	—	1	—	—	—	—	—	4
総　計	100	100	100	100	100	100	100	100	100
人　数	105	98	140	190	173	82	91	122	112
4～6の複合的な家族の比率	13	25	15	20	42	26	45	54	53

表 7　家族の血縁関係による多数家族の数

村	年	1両親の家族単位と1既婚子弟家族単位	1両親の家族単位と複数の既婚子弟家族単位	複数の兄弟家族の家族単位	総計
ペルバール，1747	1747	3	1	1	5
ピリシュ－サーントー，	1747	12	1	4	17
ナジコヴァーチ，	1747	7	—	2	9
	1769	24	—	2	26
ファイス，	1762	34	8	14	6
シャールピリシュ，	1792	11	2	4	17
	1804	24	3	5	32[a]
アルショーニェーク，	1792	32	4	11	47
ケルケド，	1816	20	16	4	40

a．表5に示されている1804年のシャールピリシュに見られる33の多数家族の1つは，その家族単位関係が明らかでないという理由で，ここには含まれていない。

表5　家族構造：タイプ別の家族数

家族タイプ	ペルバール 1747	ピリシュサーントー 1747	ナジコヴァーチ 1747	ナジコヴァーチ 1769	ファイス 1762 独立した家族	ファイス 1762 使用人家族	シャールピリシュ 1792 独立した家族	シャールピリシュ 1792 使用人家族	シャールピリシュ 1804 独立した家族	シャールピリシュ 1804 使用人家族	アルショーニューク 1792 独立した家族	アルショーニューク 1792 使用人家族	ケルケド 1816 独立した家族	ケルケド 1816 間借り人家族
1. 独り暮らし														
1a. やもめ（男・女）	1	3	6	5	1	—	—	—	—	—	2	—	—	—
1b. 独身	—	—	2	—	—	—	2	—	1	—	1	—	—	—
2. 一家族をなさない家族	1	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3. 単一家族														
3a. 夫婦	10	17	16	24	7	2	3	—	1	1	2	1	4	—
3b. 夫婦と子供	77	49	89	115	74	5	52	1	39	5	49	1	42	—
3c. 男やもめと子供	—	—	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	2	—
3d. 寡婦と子供	3	3	5	7	7	1	—	3	1	2	1	—	4	1
4. 拡大家族														
4a. 祖父母への拡大	5	6	6	6	11	—	2	—	4	—	13	—	13	—
4b. 子弟への拡大	1	—	1	—	4	—	—	—	1	—	—	—	1	—
4c. 兄弟への拡大	—	1	2	5	3	—	2	—	3	—	5	—	1	—
4d. a〜cの混合	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5. 多数家族														
5a. 祖父母との複合世帯	2	1	4	18	1	—	—	—	2	—	2	—	2	—
5b. 子弟との複合世帯	1	11	2	6	39	—	11	—	25	—		—	30	—
5c-d. 同一レベル（兄弟）の複合世帯	1	3	2	2	13	—	4	—	5	—		—	4	—
5e. 他の多数家族	1	2	1	—	3	—	2	—	1	—		—	4	—
6. 分類不可能	2	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—
家族総数	105	98	140	190	165	8	78	4	83	8	120	2	111	1

あった。そこでは，成人の使用人と日雇い農の数（彼らの子供を除く）は，明らかに西欧よりずっと低かった。このことは労働組織形態の違いによるものと考えられる。産業革命の前でさえ，労働力移動は，西欧においてはハンガリーよりかなり大きかった。労働力移動は，ハンガリーでは1785年まで禁じられていたが，西欧では禁じられていなかったためである。西欧では，賃労働はかなりの程度農場や作業場の必要を補った。しかしハンガリーでは，より強固な封建的諸条件，より低い人口密度，未発達な社会的生産基盤の故に，家族経済単位の労働力需要は大部分，家族構成員によって満たされた。ドイツ人の移民とその子孫は西欧的な労働組織形態を導入し，トランスダニューブ南部の農民よりもよりよい経済条件の下で生活したと推論してよいかもしれない。

ハンガリーでの家族規模や家族構造に関するこうした情報は，そのきわだった特徴や多様性，変化の傾向に興味深い洞察を提供している。ピーター・ラスレットによって作り上げられた分類法による家族分析[34]は，これらの特徴をよりはっきりと説明している。（表5，6）

表7に示されているように，ハンガリーの多数家族を3つのグループに分け，さらに細かく分類することが，有益であろう。1）1両親の家族単位と，1既婚子弟の家族単位により構成される家族。（血統家族タイプ：stem family type）2）1両親の家族単位と，複数の既婚子弟の家族単位により構成される家族。（家長家族タイプ：patriarchal family type）3）複数の兄弟家族の家族単位。ただし両親の家族単位を含まない家族。（兄弟タイプ：frérèche type）

ブダ周辺の3つの村ではタイプごとの家族分類は，西欧と非常に類似しており，圧倒的多数は，単一家族タイプである。他方，トランスダニューブ南部の4つの村では，拡大家族，更には多数家族の比率が西欧よりずっと高い。しかし，それはエストニア[35]と同程度であり，ラトヴィア[36]より低く，ロシア[37]よりずっと低い。おそらく，セルビアのザドルガ[38]より

ーチでは，1747-1769年にかけて使用人の数が若干増大し，そこから家族の平均規模の拡大をひきおこしている。それ故家族の人数は，主として，(既婚の子弟を含む）他の親族の数と，家族に含まれる使用人の数とで異なってくる。(表3)

しかしながら，家族に含まれる日雇い農の数について見ると（表4)，他の違いが判明する。より貧しいピリシュサーントーのスロヴァキア人の村では，他の家族のところに住む家なし日雇い農はほとんどいない。他方日雇い農の数は，ドイツ人住民が圧倒的多数を占めるブダ周辺の2つの村では多いのである。ファイスとシャールピリシュでは，日雇い農の多くは，結婚しており，時には子供がいる。それ故，家族ごとの日雇い農の平均数はかなり高いが，ブダ周辺の2つのドイツ人村ほど高くはない。ケルケドには何故使用人も日雇い農も見られないのかは明らかでない。

ハンガリーの共同体のこうした特徴を西欧の共同体，特にイギリス，フランスの特徴[31)]と比較し，他方でセルビア[32)]，ロシア[33)]の共同体と比較してみると，トランスダニューブ南部では，西欧に比べ家族規模が幾らか大きいが，ブダ周辺の農村や大平原の都市では，おおよそ西欧の水準であることがわかる。ジェールの町では，家族規模は特に小さい。しかしこれまで調べてきたハンガリーの共同体家族のすべては，ロシアや（南スラヴの）ザドルガよりも平均して小さいのである。

ブダ周辺の3村においては，3，4世代の家族は，西欧と同じくらいの頻度で起こるようであるが，その頻度は，トランスダニューブ南部ではより高い。しかし，ロシアほど高くはないのである。

家族ごとの使用人の数は，ナジコヴァーチでは西欧と同様であるが，トランスダニューブ南部では若干少ない。他の重要な差違は，ナジコヴァーチでは使用人は結婚していなかったが，トランスダニューブ南部では彼らはしばしば結婚し，子供もいたことである。トランスダニューブ南部では，使用人は日雇い農とほとんど区別できず，統計上の区別もしばしば曖昧で

家族構造は，家長と配偶者，未婚の子弟，（既婚の子弟を含む）他の親族，使用人の平均数を数えることによっても分析できる[30]。他の親族の数は，トランスダニューブ南部で明らかに多く，一方，使用人の数は，（ペルバールの例外を除き）ブダ周辺でかなり多い。他の親族の数は，1792-1804年にかけ，シャールピリシュでも増大している。一方，ナジコヴァ

表3　家長との関係における家族構成員の平均数

村	年	家長と配偶者	夫婦の実子	既婚の子弟を含む他の親族	使用人	間借り人・不明者	家族全体の平均規模	一家（夫婦と実子）の平均規模
ペルバール，	1747	1.93	2.38	0.23	0.10	0.04	4.68	4.31
ピリシュサーントー，	1747	1.90	1.71	0.66	0.33	0.01	4.61	3.61
ナジコヴァーチ，	1747	1.89	2.19	0.35	0.38	0.01	4.82	4.08
	1769	1.92	2.36	0.42	0.58	—	5.28	4.28
ファイス，	1762	1.84	2.31	1.67	0.08	0.01	5.91	4.15
シャールピリシュ，	1792	1.83	2.61	1.07	0.08	—	5.53	4.44
	1804	1.85	2.33	1.50	0.09	—	5.77	4.18
アルショーニェーク，	1792	1.67	1.86	2.03	0.21	0.03	5.80	3.53
ケルケド，	1816	1.55	1.70	2.48	—	0.02	5.75	3.25

表4　一家族における使用人，家なし日雇い農，間借り人の平均数

村	年	使用人	日雇い農	間借り人
ペルバール，	1747	0.10	0.39	0.02
ピリシュサーントー，	1747	0.33	0.19	—
ナジコヴァーチ，	1747	0.38	0.49	0.01
	1769	0.58	0.46	—
ファイス，	1762	0.08	0.17	0.01
シャールピリシュ，	1792	0.08	0.17	—
	1804	0.09	0.33	—
アルショーニェーク，	1792	0.21	0.04	0.01
ケルケド，	1816	—	—	0.02

規模は，トランスダニューブ南部の村シャールピリシュ，アルショーニェーク，ケルケド，さらにファイスで最も高い。ファイスはドナウの対岸で大平原に位置しているが，シャールピリシュ，アルショーニェークに非常に近く，環境条件も似ている。そのため，これら4つの地域は，トランスダニューブ南部の村として一括して論じられる。ブダ周近の3つの村，ペルバール，ピリシュサーントー，ナジコヴァーチでは，家族の平均規模は小さく，大家族は一般的ではない。ヤースベレーニ，ケチュケメートの2つの都市，大平原のマジャルチャナードの村も同様である。家族の平均規模が最も小さいのはトランスダニューブ西部のジェールである。2つの統計に示されている村はいずれも環境，経済条件が大きく異なっており，民族・宗教の異なる人々が住んでいたが，どの村でも家族の平均規模は最初の統計から第2の統計にかけて明らかに拡大している。

同様に，3, 4世代同居の家族の比率は，地理的違いによって異なっている。（表2参照）トランスダニューブ南部の4つの村では，ブダ周辺の3つの村よりも，3世代家族の比率は高い。シャールピシュでは3世代家族の比率は1792-1804年の間にかなり高まり，家族の平均規模の拡大を生み出している。

表2　世代数による家族分布

家族内世代数	ペルバール 1747 (%)	ピリシュサーントー 1747 (%)	ナジコヴァーチ 1747 (%)	ナジコヴァーチ 1769 (%)	ファイス 1762 (%)	シャールピリシュ 1792 (%)	シャールピリシュ 1804 (%)	アルショーニェーク 1792 (%)	ケルケド 1816 (%)
1	10	21	19	15	7	6	3	5	4
2	81	69	71	73	65	80	66	58	59
3	8	10	10	12	27	14	31	36	36
4	—	—	—	—	1	—	—	1	2
不明	1	—	—	—	—	—	—	—	—
総計	100	100	100	100	100	100	100	100	100
人数	105	98	140	190	173	82	91	122	112

表1　家族規模の分布

家族の人数	ペルバール 1747 (%)	ピリシュサーントー 1747 (%)	ナジコヴァーチ 1747 (%)	ナジコヴァーチ 1769 (%)	ファイス 1762 (%)	マジャルチャナード 1787 (%)	ヤースベレーニ 1787 (%)	ケチュケメート 1787 (%)	ジェール 1787 (%)	シャール 1792 (%)	ピリシュ 1804 (%)	アルショーニェーク 1792 (%)	ケルケド 1816 (%)
1	2	3	6	3	1	3	2	2	6	3	1	2	—
2	11	19	12	10	8	18	10	11	15	4	3	4	5
3	16	21	17	9	9	12	15	15	20	11	9	9	12
4	20	11	11	19	13	14	20	17	20	10	22	18	17
5	18	11	14	15	17	15	17	17	15	27	17	20	22
6	18	11	17	12	18	11	16	14	10	17	11	15	15
7	5	10	9	12	11	13	9	10	6	16	13	14	6
8	6	10	6	10	10	5	6		4	5	11	11	9
9	2	3	6	4	6	3	3	12	2	3	10	4	4
10	2	—	1	3	3	2	1		1	—	1	1	2
11	—	1	—	1	1	1	1			1	1	1	5
12	—	—	1	—	—	—	—	2	1	1	—	—	1
≧13	—	—	—	—	3	3	1			2	1	1	2
総　計[a]	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
人　数	105	98	140	193	173	239	2,117	453	2,982	82	91	122	122
家族の平均規模	4.67	4.61	4.28	5.28	5.91	5.13	4.92	5.08	4.30	5.53	5.77	5.80	5.75

a．この表および以下の表において，個々のパーセンテージの総計が正確に100%にならない場合がある。

であった。それ故，最初の統計と，貴族以外の人々の統計は，家族構成の真実を伝えているとみなされてよい。他の機関によって作られた統計の場合，例えば「教区民調査書」のような統計については，我々は，その中にどういった原則で人々が分けられているのかということはほとんどわからない。それ故我々は，一緒に住んでいるとされている（一続きの数や，文字・下線によって，あるいは，一定のまとまった人数で示されている）人々が，一家族を構成していると考えねばならない[22]。

使用人と家なし日雇い農[23]の分類は，さらに大きな問題を引き起こす。彼らは，さまざまな統計で，異なった扱いを受けている。ある場合には，家なし日雇い農と使用人は，単にリストの終わりに示されるだけである[24]。他の場合には，彼らが属している家族が表示される[25]。別の場合には，彼らは属している家族の中に含まれてしまっている[26]。彼らが別の家庭を築いていたのか，それとも，彼らが属している農奴の家族の一員であったのかどうかを決定することは困難である[27]。おそらく，多くの中間的状況があったであろう。彼らは，同一地域内の別の家か牛小屋に住み，少なくとも夏には，村からいくらか離れた土地に建てられた農奴の別宅に住んでいたと思われる。おそらく，彼らは，消費については幾分かを共有し，農場での生産に参加したのであろう。あるいは，少なくとも彼らの一部は，他の農奴の代わりとして働いたかもしれない。初期の刊行物では，これらの家なし日雇い農と使用人は様々に扱われていた[28]が，この論文では，所帯を持たない使用人と家なし日雇い農は，彼らが属していた家族の一員として扱うことを原則とした。彼らが明白に独立して住んでいたり，所帯（配偶者，あるいは子供）を持って別の家族を構成していた場合を除いては[29]。ただし，表5に限り，他の表では別の家族として扱われている使用人と家なし日雇い農の家族が，別の欄に示されているが，それは，彼らの家族構造を知り，彼らを家族として扱うことの持つ意味を知るためである。

家族の平均規模と，構成人数ごとの家族の分布（表1）によれば，家族

た[16]。

さらに我々は次の４つの共同体において，家族分類の規模に関するデータを利用することができる。

第１番目のマジャルチャナード (Magyarcsanád) は大平原の南東部の村で，ハンガリー人，セルビア人，ルーマニア人が混住していた[17]。次のヤースベレーニ (Jászberény) とケチュケメート (Kecskemét) は大平原の中北部にある２つの農業市場町で，前者には，ローマ・カトリックのハンガリー人が，後者には，ハンガリー人カルヴィニストが住んでいた。両地域では，農奴制の拘束は比較的ゆるやかであった[18]。第４のジェール (Győr) は，ハンガリー西部の都市で，ローマ・カトリックのドイツ人，ハンガリー人の混住地であり，ごく短期間トルコ帝国に占領されただけで，常に西欧の影響下にあったところである。我々が調査したハンガリーの共同体のうち，ジェールは，あらゆる点から見て最も西欧の都市形態に近かった[19]。

ラスレットの分類方法を使った多くの研究において，統計に示されている人々が実際に家族を構成していたのかどうか，即ち，彼らは現実に一住居に住んでいたのか，それとも家業を営む目的で一構成単位をなしていたにすぎないのかを知ることが必要となった。古くからの農村共同体にとって，家族を構成する基準はいわゆる生産の共同であったと考えられるからである。フェール (Fél) とホファー (Hofer) が指摘しているように[20]，共同生産と住居・消費は，必ずしも一体ではなく，さまざまの結びつきが可能であった。例えば，共同で居住するが消費は別々，生産は共同[21]というものである。最初のハンガリーの統計では，1804-47 年における貴族以外の住民の統計と同様，食事を共にする人々が１家族を構成しているということが基本原則であり，それは，彼らが別居している場合，即ち同じ地域内の別々の家に住んでいる場合にも妥当した。当時，農奴の既婚子弟が，両親の母屋近くに建てられた，同一地域内にある別の家に住むことは慣習

ガリーの2大中心都市，ブダとペシュトに近い村である。17世紀末，この村には，1686年にトルコの占領から逃れて移動してきたローマ・カトリックのドイツ人農民が住んでいた。ナジコヴァーチは，ドナウ河流域に位置し，森に囲まれている。

ペルバール (Perbál) は，ナジコヴァーチ近郊の村で，1720-30年頃からの新開地である。ここには，ナジコヴァーチを含む近郊の村からやってきたドイツ人，さらにはハンガリー人，スロヴァキア人の農民が住んでいた。ペルバールは平野に位置し，周辺の土地はナジコヴァーチ周辺よりもずっと肥沃である。

ピリシュサーントー (Pilisszántó) は，やはりブダとペシュトに近く，トルコ支配後1700年頃に移民してきたスロヴァキア人農民が多く住んでいた。ここは山岳地帯に位置し，耕地はほとんどなく，土地は痩せていた[13)]。

第4の村ファイス (Fajsz) は，ドナウ河沿いのハンガリー南部にあり，貴族に上昇しようとしていたローマ・カトリックのハンガリー人農民が住んでいた。領主としての教会の力はさほど大きくなかった。村はドナウ河がしばしば氾濫をおこす地域に位置していたため，耕地は非常に不足しており，牧畜と果樹栽培が主要な産業であった[14)]。

シャールピリシュ (Sárpilis) とアルショーニェーク (Alsónyék) は，トランスダニューブ南部のシャールケズ (Sárköz) 地方にある2つの隣合わせの村であり，同じドナウ河沿いではあるが河の対岸にあるファイスからそう離れてはいない。この地域にはハンガリー人カルヴィニストが住んでいた。ここは，湿地帯の上，しばしば氾濫がおこって耕地はほとんどなく，牧畜と狩猟，漁業が生活の糧となっていた[15)]。

ケルケド (Kölked) もトランスダニューブ南部の都市であり，ドナウ河沿いではあるがシャールケズ地方のやや南部にある。ここにはハンガリー人カルヴィニストが住み，環境はシャールケズ地方の他の村とよく似てい

なっている[10)]。社会人類学者による調査でも，過去数世紀に亙る家族構造に関する研究が出されている[11)]。

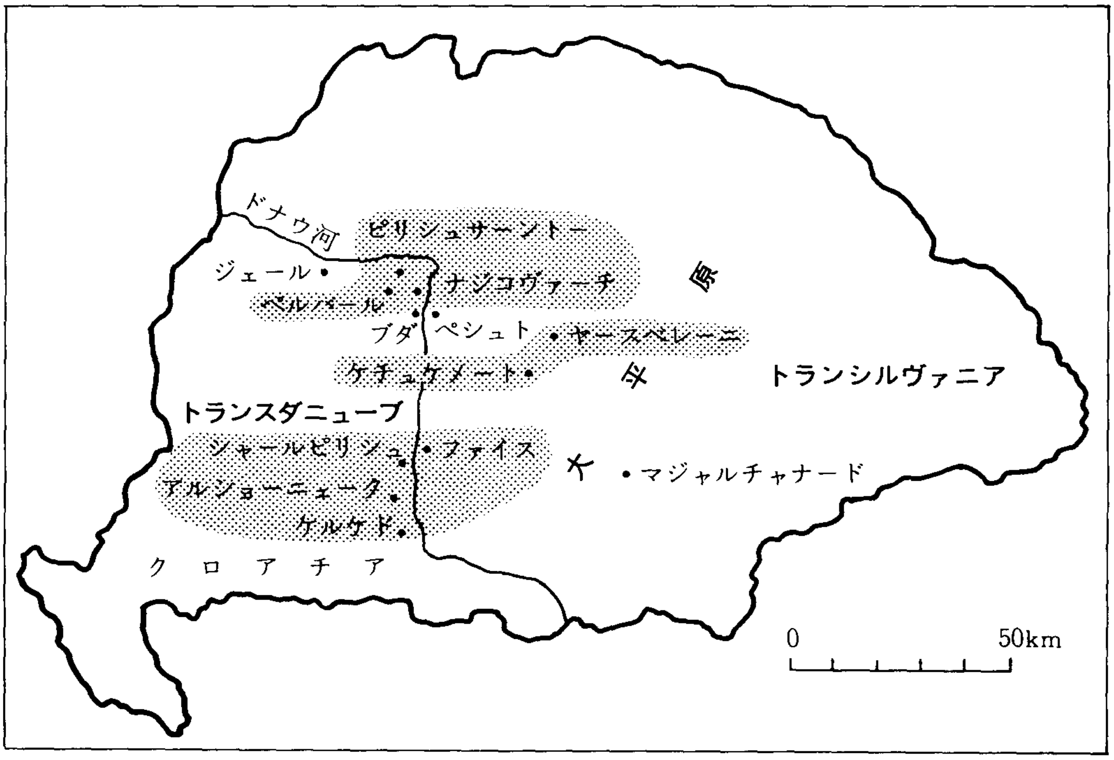
家族構造に関するこうした資料は，比較的豊富である。しかし残念ながら，初期の時代に行われた研究は統一された評価方法を使っておらず，そのため，異なった調査の結果を比較したり，ハンガリーの家族構造の型やその多様性を明確に示すことはできていない。ピーター・ラスレットによって作り上げられた分類法[12)]は，統一された評価方法を使うことによって，さまざまのハンガリーでの調査結果を互いに，かつ他国の家族構造とも比較することを可能にした。

ミクロな調査

ラスレットの方法によって調査された共同体は，図1および以下に示されている。

ナジコヴァーチ (Nagykovácsi) は，18 世紀に急速に発展した中央ハン

図1　ハンガリーにおける共同体研究の対象地域



研究は，セルビア社会においてザドルガ型の複合的な家族が非常に一般的であることを明らかにした。また，ピーター・チャプ（Peter Czap）の研究は，19世紀のロシアにおいては，農奴の間に，非常に大規模で複合的な家族が見られたことを結論づけている[5]。

以上のことから，産業化以前のハンガリーで一般的であった家族構造の型と，家族規模とが問題となる。ハンガリーの家族構造が東欧の型よりも西欧の型の方に類似していたかどうかを論ずることは興味深いにちがいない。しかし18世紀および19世紀のハンガリー社会はトランシルヴァニア，クロアチアの住民を含み，（農奴，日雇い農，職人などの）社会階層や，民族，宗教においてきわめて多様であったため，問題は複雑になる。

資料

1784-87年におけるハンガリーの最初の統計が公表された結果，家族の平均規模と一家族内で18歳をこえる男子の平均人数を調べることが可能になった[6]。オリジナルな統計表は，残念ながら，例外的な場合にしか利用できない。公開された統計表は，家族規模のみならず，家族構造，及びその変容を調べる上でも貴重な資料を提供している[7]。加えて，「教区民調査書（status animarum）」のような共同体の住民の統計表が，18世紀半ばから19世紀の最初の数年間に，聖職者自身のイニシアティヴや，行政当局の要請によって，整備された。これらの多くの統計は，利用可能であり，例えば，個々の教区の統計[8]だけでなく，ヴェスプレーム（Veszprém）司教区の完全な統計[9]も利用できる。それ以前の統計は，行政目的のために整備されたものである。例えばシゲトヴァール（Szigetvár）県の住民統計は，トルコ軍の侵入から逃れて町にやってきた多くの人々に関する資料を提供するために作られた。他方，バラニャ（Baranya）県の住民統計は，トルコ軍が駆逐された後の地域に住みついた人々に税を課すために作られた。これらの統計は，現存し，既に分析の対象と

を正確に認識する上でも重要であろう。

訳註

(*1) 本論文は，*Family Forms in Historic Europe*, ed. by Richard Wall, Cambridge. 1983. に書かれたアンドルカとファラゴーの論文を訳出したものである。

(*2) モルヴァイは，ハンガリーの大家族制について，

1) それが19世紀より過去2,300年にさかのぼる家長的大家族を特徴とすること，

2) 大家族の平均は20～25名であり，40名に及ぶものもあったこと，

3) 大家族は経済的単位であり，さまざまの血縁者や使用人がその枠内に入っていたこと，

などの点において，以下に述べるアンドルカ，ファラゴーの論点との違いを見せている。

はじめに

ハンガリーの社会人類学者[1]によれば，産業化以前のハンガリー農民は，両親と数組の既婚子弟の家族を含む大家族制の下に住んでいるとされていた。しかし歴史家たちが，ハンガリーの家族規模および構造を過去数世紀における村や大所領地の居住者の統計を使って調査したところ，平均的な規模は小さいことが明らかとなった[2]。1784-87年に行われた最初の統計に基づいて刊行された要約資料を使うことにより，人口統計学者タマーシ(J. Tamásy)は，ハンガリー，トランシルヴァニア，クロアチアを合わせた家族の平均的規模は，5.28人であることを立証した[3]。

ラスレット(Laslett)は，多くの社会学者，歴史家の推測とは反対に，イギリスと北西ヨーロッパでは家族の平均的規模は小さく，複合的な(complex) 家族(拡大家族：extented-family，多数家族：multiple-family)の比率も低かったことを明らかにした[4]。他方，セルビアの家族

ハンガリーにおける 産業化以前の家族構造(*1)

ルドルフ・アンドルカ，タマーシュ・ファラゴー著
羽場 久浘子 訳

訳者より：

ロシア・東欧の多くの地域では「農村共同体」が今世紀初頭まで，あるいは戦間期を通じて存続したとされる。南スラヴの大家族制ザドルガ zadruga は，現代に至っても一部の地域でその名残をとどめている。近年，日本の東欧史研究においても，そうした大家族共同体の研究が進められ，18, 19 世紀の実態が明らかにされつつある。

本論文は，ハンガリーにおいて，はたして大家族共同体が存在したのかどうか，存在したとすればその大家族制はどのような規模，形態，特徴をもっていたのかを，詳細な資料と統計をもちいて明らかにしようとしたものである。

アンドルカ，ファラゴーは，ハンガリー中央統計局の研究者であるが，ハンガリーの大家族制の伝統を主張するモルヴァイの学説(*2)に対して，実際のハンガリー家族はかなり規模が小さく，また家族構造は時代的にも地域的にも多様であること，さらには個人のライフ・サイクルを通してさえも変わりうるものであることを立証し，これに反論している。

東欧の農村における大家族共同体の存在の有無，あるいは存在形態を知ることは，近・現代の東欧の特徴，および彼らの国家，民族，共同体意識